

小池辰雄記念図書室だより

2015, 4. 20 (月) NO. 24 千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

1. 各地の読書会

松井 康男 (裾野)

3月21日(土)午前、都賀のオリーブ山教会で開かれた「無者キリストを読む会」に妻、幸子(ゆきこ)と共に参加させていただいた。前日夕べ、庄司姉妹の御宅で開かれた「夫婦の会」に出席したその翌日であった。

当日学んだ箇所は「無者キリスト」の第3部、「無的実存」第3章「三一神の所在」である。これは「神は何処に」、「キリストは何処に」、「聖霊は何処に」の3回連続講演の録音を文字化したもの。私の記憶では、これは1969年5月の連休のころ、京都の教育文化センターで行われた小池先生の伝道講演会であったと思う。私は4月22日(日)の聖日の集会から導かれて2週間ほどであったから、主題の「神は何処に」のタイトルのほか内容はあまり覚えていない。ただ、初めて見た65歳の小池先生(当時黒縁メガネ)が異次元的なほどの聖霊のパワーにあふれ、小柄なのにその全身からあふれる迫力の故に大柄に見え圧倒されたことを思い出す。

水谷先生は「神は何処に」のP.327からP.335を朗々と朗読し、ポイントを体験的に解説告白しながら1時間半かけて一気に読み進まれた。

聖書に証言されている神は、イスラエルの歴史を通じて自現された啓示の神で、現実には自らを顕しつつあり給う。～旧約聖書において神に呼ばれた一連の人々こそは、預言者たちであった。～「神は何処に」、それはナザレのイエスに自現しておられるというしかない。水谷師はこれらの高次で濃縮された小池先生の本文を読み解きながら、ご自身も「この神」に若くして出会い、迫られ、恵泉塾活動に踏み出した体験を大胆に告白された。「生ける神との出会いと迫り」の強烈さは私には及びもつかない世界であるが、今回の水谷先生の熱血解説は現実の実践伝道からあふれ出た告白であり、46年前の小池先生の講演に勝る説得力があった。参加されなかった方にはCDを是非おすすめしたい。次回の「キリストは何処に」が待たれる。

2. 図書室から

ご存知ない方も多いかもかもしれませんが、図書室では、上田バイブルセンターからの委託により、小池辰雄読書会のCDや水谷師のメッセージCD、聖書や文庫本、講演会や恵泉塾のDVDを販売しております。試聴もできますのでどうぞお手に取ってご覧になりお買い求め下さい。



小池辰雄を読む会

●余市

2015年5月3日(日) 13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌

2015年5月2日(土) 14:00~16:00

(札幌市南区川沿 10条 3-10-5 札幌祈りの家)

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(三ツ木)

●関西

2015年5月17日(日) 14:00~15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸バイブルハウス

*会費:500円(自由献金あり)

*連絡先:090-4645-7389(後地)

●都賀

2015年 4月18日(土) 10:00~12:00

2015年 5月23日(土) 10:00~12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

図書室だよりは偶数月発行です。

本図書室は献金で運営されています。

結核患者と共に

『愛泉』という名の、変色したザラ紙の冊子（B5版8ページ）を何冊か、父小池辰雄の遺品の中に見つけた。見つかったのは昭和31年8月の第5号から35年6月の第32号まで。発行は国立東京療養所（東京都北多摩郡清瀬町）聖書研究会である。

表紙のタイトル、書き文字の「愛泉」というロゴが美しい。そして文章は手書き、謄写版印刷である。中身は小池辰雄の講演の抄録だ。精魂込めて作られたものに違いない（謄写版印刷は、ろうびきの原紙に鉄筆で字や絵を書き、一枚一枚印刷インクをつけて刷るのだから）。結核療養中の患者さんが編集をし、原稿をまとめ、一文字一文字鉄筆で書き…、大変な共同作業で、辰雄の講演を『愛泉』の中に残しておいてくれた。

愛泉会と命名したのも辰雄だった。「身は病のベッドにあっても、私たちの靈魂のどん底にこそ、恵みの泉はこんこんとわき出でつつある。聖名の栄光のために、弱き私たちがいよいよ、『愛の泉』そのものとなり、誰にも、活ける水を分かちることが出来るように」との願いを込めたという。

療養所の福音集会は、そんな患者さん60人ほどが参加して昭和27年ごろから続いていた。辰雄は月に一度（日曜の夜に）、欠かさず出かけて行った。

結核は、明治から昭和25年くらいまで国民病と言われて恐れられた。辰雄と同じ年生まれ（明治37）の堀辰雄は、詩人・小説家だが、20歳で発病し、50歳で没するまで、何度も咯血を繰り返している。彼は、『風立ちぬ』（昭和24年刊）に、結核の療養といえばサナトリウムか高原治療しかなかった暗い時代を書いている。

全国に結核の療養所はたくさんあった。感染を恐れて家族でさえ訪ねてこないという現実もあったが、キリスト者は違った。信州・小諸療養所に通った石垣会の川口愛子さん（ママと慕われた）も、そうした棄て身のキリスト者の一人だった。昭和26年に結核予防法が出来、医療の技術、医薬の進歩によって、30年代には、もはや死因の1位ではなくなった。

「さきほど病棟の廊下を歩いていましたら、君たちのお骨折りで各病棟に『人生の目的は神を識るに在り』との演題を今日の私の話のために掲げておられるのを拝見しましたが、その『神』は、じつに、ナザレのイエスを識るのでなければ、知ることはできないのです。我は葡萄の樹、汝らは枝なりと、こ

のイエスの現実告知をそのまま受け取ることを『信じる』というのです」と、辰雄は神の言葉なるキリストを伝えていく。毎회가、水を割らない濃厚な聖書講義だった。

講演の主題は、「放蕩息子」（昭和31年8月、ルカ伝15章11～32節）、「真の葡萄樹」（31年9月、ヨハネ伝15章1～9節）、「新生」（31年10月、ヨハネ伝3章1～8節）、「永遠の生命を継ぐには」（32年4月、マルコ伝10章13～31節）、「取税人ザアカイ」（32年9月、ルカ伝19章1～10節）、「無学の凡人」（32年10月、使徒行伝第4章1～31節）、「ピリポの伝道」（33年3月、使徒行伝第8章）、「パウロの回心」（33年6月、使徒行伝9章1～19節）、「聖霊の賜物」（35年3月、コリント前書12章1～11節）、「天国の労働人」（35年6月、マタイ伝第20章1～16節）など。

このうちの「新生」（第7号に掲載）で彼は告白している。

「肉の誕生に対して靈の誕生を、第二の誕生日と言います。私の第二の誕生日は、今から30余年前の大正12年、内村鑑三先生の日曜集會に初めて参会した日から始まった。それが次第に進展して昭和25年、はっきり脱皮したというのが真相です。幾十年の信仰生活も、私にとっては、真の『新生』を迎えるためだった。ああ、この新生！ 腸の中に涙が湧きます。」

常に今日一生であった。毎回の証の中で患者さんたちに生けるいのちの水の源泉を伝え、祈りへと導く真剣勝負の連続だった。神の恩寵によって病が癒され、東療を退所していく人があり、しばらく自宅で静養した後、仕事に就く人があり、手術に成功して喜ぶ人があり…、『愛泉』の消息欄には朗報が増えていく。それとともに吉祥寺東町の武蔵野幕屋（昭和15年に自宅で始めた）の集會には、「東療の卒業生」の出席が増え、辰雄の伝道を共に担っていくことになる。

